

お江戸日本橋創架四〇〇年 6

- 栃木市・倭町「静御前」 8
- 栃木市・萬町「劉備玄德」 8
- 室町一丁目会 10
- 日本橋一丁目町会 12
- 日本橋二丁目町会 13
- 日本橋三丁目西町会 14
- 八重洲一丁目東町会 15
- 日本橋小舟町町会 17

対談

「江戸噺あれこれ」 38

一区一番組組頭・西出幸二
作家・森まゆみ
神田倶楽部会長・田畑秀二

寄稿

母と曾祖父を偲びつつ神田の町が身近に感じました 118

人形師「仲秀英」の曾孫 斎藤道子

神田祭 20

- 東日本橋・船渡御 20
- 岩本町一丁目町会・我が町会の開府四〇〇年 22
- 東神田・花万燈 28

木札制作裏話 120

二世 後藤 錦

小舟町・大提灯 32

江戸天下祭 46

東京都千代田区 50

- ・九段三丁目町会「牛若丸」
- ・三番町町会「東郷元帥」
- ・九段四丁目町会「弁慶と牛若丸」
- ・神田松枝町町会「羽衣」
- 青梅市・森下町「武内宿禰」 56
- 遠州横須賀 64

江戸神輿の競演 (p18)

女みこし(須田町中部町会)
平河町一丁目町会神輿(麹町出張所地区連合会)
飯田橋町会神輿(富士見地区町会連合会)
岩本町二丁目大和町会神輿(岩本町東神田町会連合会)
司町二丁目町会神輿(神田公園地区連合町会)
神田五軒町々会神輿(萬世橋地区連合町会)
神保町三丁目町会神輿(神保町地区連合会)
東松下町々会神輿(神田駅東連合町会)
神田和泉町町会神輿(秋葉原東部町会連合会)

あとがき 121

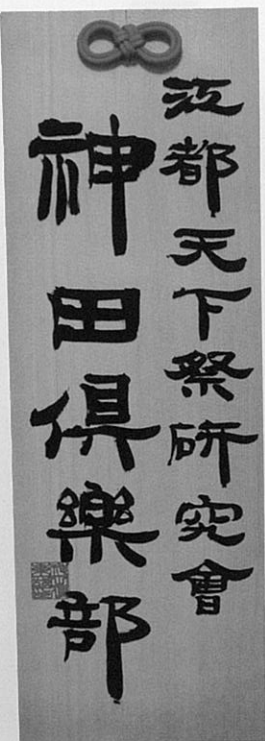
編集後記 122

◆付録・納札に見る天下祭山車

江戸開府四〇〇年に帰ってきた天下祭の山車

- 熊谷市・本三四「戸隠」 72
- 鴨川市・山王講「恵毘寿」 80
- 川越市・志多町「弁慶」 86
- 加須市・本町「蘭陵王」 90
- 青梅市・仲町「静御前」 94
- 石岡市・金丸町「辨財天」 98
- 本庄市・仲町「神武天皇」 104
- 八王子市・八幡町一・二丁目「諫鼓鳥」 110
- 鴨川市横渚・前原 諏訪講「神功皇后」・「源頼義」 114

目次 CONTENTS



◆山車の名称等は各地域よりご教示頂いた名称を用いています。また文中、江戸開府四〇〇年記念事業として行われたパレードを総称し「江戸天下祭」と表記してあります。
本誌及び付録の無断転載を堅くお断り致します。
江都天下祭研究会 神田倶楽部

スプラッシュする世界のイチロー



東松下町々会神輿

「江戸天下祭」を彩った九基の江戸神輿

女みこし(須田町中部)・平河町一丁目・神保町三丁目・東松下町・神田和泉町の各町会神輿の撮影:和田義男

神田五軒町々会神輿



神田和泉町町会神輿



司町二丁目町会神輿



女みこし(須田町中部町会)



飯田橋町町会神輿



平河町一丁目町会神輿



神保町三丁目町会神輿

岩本町二丁目大和町会神輿



江戸神輿の競演



先導する高張り提灯

祥の地としても知られている。その昔は神田明神祭礼の中核的存在であった神田市場の伝統を受け継ぎ、神田ツ子の心意気や気っ風にふさわしい大変な文化財を諸先輩が残してくれている。

今回の江戸開府四〇〇年事業の江戸天下祭で各地に散っていた往年の神田の各町の山車が里帰りし順行されたが、かつて当町においても山車が二つあった。それは佐柄木町(義勇会)の神武天皇の山車で現在この山車人形は神田神社に保管されている。もう一つの山車は連雀町町の熊坂の山車で、山車人形は現在当町会の小栗さん(小田原屋さん)が保管管理しているが、戦後すぐの神田復興祭にはいずれも町会の一角に夫々展示されている。又その他には、現在も町会で保管し、神田明神本祭には神酒所にも飾られている。四神剣、雄雌二基の獅子頭で、これは当時佐柄木町が神輿二基(一の宮、二の宮)と共に大正年間制作したもので、神輿一基は関東大震災で焼失したようであるが、これらを義勇会が引き継ぎ現在に至っているようである。この現存する神輿はやや小振り(台輪一尺三寸)ではあるが、以上のごく由緒正しきものである。しかし大人にはちよっと小さく子供にはやや大きすぎることもあり、本祭り連合渡御の折には中高生を中心に担がせていたが、最後まで道中は仲々難しく、大人

の助けを求めるような状態であった。その後中高生が減少し、大人でという声もだが、昭和五〇年頃より町会婦人部も大変乗り気で喜んで参加してくれたので、昭和五二年より連合渡御も本格的に女性専科の「女みこし」で行こうということになった。当初は女性が担ぐということとは、当時のアルサロのお姐さんが景気づけで担ぐような程度のものであったし、町内男性からも不満の声があった。また、長老方には「神輿は女なんか担がせるものじゃねえ」等とお叱りを受けたこともあったが、試行錯誤の中で、華やかで、品が良く、女性らしく、ということ現在のような衣装に統一して「女みこし」を演出し本格的に軌道に乗せることができたのである。そしてマスコミにも大変宣伝され、テレビ各社のさまざまな番組にも出させていただき、平成二年には京都亀岡市にも招かれ神輿振りを披露した。そして須田町中部といえ「女みこし」と名物になったが、これは我々が先鞭をつけたものだといささか自負している。

今般千代田区江戸開府四〇〇年江戸天下祭に参加を要請され、台輪二尺の神輿を新調しての参加だったが、神田明神本祭の連合渡御にも見られない三十万人という大ギャラリイの中で「女みこし」が一番という大変光栄な位置で衆目を集めましたことは大いに興奮し、感激した。「女みこし」は日本の文化として、また江戸神田の文化としての神輿渡御の中に、新たなお祭り文化を創り上げたものと思っている。

今後もさらに「女みこし」で、一層お祭り文化を盛り上げるべく頑張るつもりでありますのでよろしく願います。

(元祖「女みこし」)

須田町中部町会 町会長 大塚 實